

# 広場と芸能

—その時空—

小笠原恭子

- 一 広場の時空
- 二 古代芸能の場
- 三 道・辻・広小路

## 論文要旨

日本における芸能上演の空間として、限定された閉鎖的空間と開放的空間、あるいは固定された場と移動の機能をもつ場という観点から考察する。

神話における天の石屋戸の前や踏歌・歌垣が行われた場は開放的空間と考えられよう。

祖先神の祭祀における芸能・「舞」・猿楽は閉鎖的空間を舞台とし、御霊会の芸能・「踊り」・田楽は開放的空間で演じられる。

後者は権力者側から規制され、芸能自体の生命は短い傾向にする。移動の機能をもつ場としては道・辻・広小路等が考えられよう。

祖先神の来臨、疫癘の退去を目的とする祭祀（御霊会）の場における芸能は移動を伴うものであり、その道筋は異郷と交通可能な空間となる。

また、芸能を自由に提示し得る場、という観点に立てば辻も開放された公界であろう。近世になると辻空間は体制の意思を傳達する場に変質していく。

- 四 興業としての空間
- 五 聖空間の限定
- 六 「狭い場」への志向

さらに江戸の広小路は新しい盛り場として芸能興行の場となっている。

ところで、中世には芸能は興行という形態を取るが、応仁の乱以前の京においては寺社境内や河原に勧進聖によって棧敷が設営された。舞台は円形に取り囲んだ観覧席の中心に位置し、ここにおいて芸能は「閉鎖された広い空間」という提示の場を持つことになった。この芸能興行は、冥府に接する地であり、いわゆる未成霊の鎮魂のために行われ、棧敷内部には未成霊の侵入を許さぬよう閉鎖された空間であった。

近世の歌舞伎によって、閉鎖空間における芸能提示の場が恒常化した。

また、歌舞伎の場には、移動を機能とする道も花道として新しく付けられた。

日本の芸能が、神降臨という祭祀の基本を伝え持とうとする限り、その場は「道」なのであって、芸能は傘等によって狭い場へと限定志向していく。